

2012（平成 24 年度）短期派遣 EUROPA 報告書

氏名：久米 順子（大学院総合国際学研究院 講師）

派遣先：マドリード自治大学、現地受入教員：カルメン・サンチェス教授

派遣期間：2012 年 7 月 19 日-2012 年 9 月 21 日

派遣目的：美術史学の研究に関わる文献収集および作品現地調査

研究テーマ：中世トレドの建築と美術

研究の概要：

スペインの古都トレドは、中世期にキリスト教、イスラーム、ユダヤ教文化が混在した都市として知られている。街はタホ河に囲まれた天然の要塞であるために土地に限られており、ひとたび建てられた宗教建築が別の宗教のために再利用されることも珍しくなかった。また、イスラームの影響を強く受けたキリスト教美術であるモサラベ美術や、イスラームの職人がキリスト教徒やユダヤ教徒のために手がけたムデハル建築の例も豊富である。これら異宗教間での建設や転用が行われた歴史的な文脈やその建築の具体的な特徴、内部で用いられた装飾・荘厳美術などを調査し、中世のトレドで異宗教・異文化がどのように理解されていたのか（あるいは無理解のまま、あるいは誤解をもって受容されていたのか）を具体的な作品に即して明らかにするのが本派遣計画の目的である。

研究の成果及び今後の課題：

トレドでは、レコンキスタ後に増築されてモスクから聖堂に転用されたエル・クリスト・デ・ラ・ルス教会、シナゴグからカトリック聖堂となったサンタ・マリア・ラ・ブランカ教会、イスラーム職人によるムデハル建築のひとつで内部に壁画が残るサン・ロマン教会、キリスト教君主ペドロ 1 世の財務官を務めたユダヤ人サムエル・ア・レヴィがシナゴグとして建造したムデハル建築のエル・トランシト教会などの実見調査・撮影を行った。トレドには無数の教会や修道院があり、その多くに塔をはじめとするムデハル建築による増築部が見られる。内部に入ることは難しいものの、一般の住居にもイスラーム支配時代（中世前期）などの名残が至るところに見受けられる。時間をかけて迷路のような街路を彷徨し、時代や職人の出自による様式の差異を分析しながら、トレドの建築にじっくりと向き合えたのが何よりも収穫となった。

一方、それらの建築に関する先行研究渉獵のため、マドリードのスペイン国立図書館やスペイン高等学術研究院人文学研究センター図書館で文献調査を行った。トレドでは、市立文書館、大聖堂付属図書館・文書館および地方史セクションの充実で知られるカスティーリャ・ラ・マンチャ州立図書館で文献の収集にあたった。

また、トレドの文化財発掘・修復・保存・公開にあたっているコンソルシオ・デ・トレド（第三セクター的な性格の機関）のオフィスや、トレド市の観光課などで、こうした文化財の現状についての情報を得ることが出来た。ムデハル建築の代表作の一つであるタジェール・デ・モロなど一部の建築が長年閉鎖されているのは、技術的ないし経済的な問題ではなくもっぱら政治情勢のためであること、今後も公開の見通しが立たないことなど残念なニュースも少なくなかったが、住居のリフォームなどに伴ってこれからも興味深い中世の遺構が発見される可能性が極めて高いことが分かった。

受け入れ機関のマドリード自治大学では、夏季休暇のためほとんどの研究者が不在であり、学術的な観点からは芳しい成果を得られなかった。しかし、専門分野は異なるものの若手の美術史研究者と交流を持つことができ、スペインの大学・研究機関・美術館の現状を知ることができたのは貴重な経験となった。

これから、とりあえず大量の文献と写真の整理に時間を割かなければならない。その後、まずはキリスト教主題の絵画にアラビア文字の銘文が混在するサン・ロマン教会の建築と壁画プログラムを足掛かりとして成果を論文としてまとめていき、スペインないし日本の学術雑誌、あるいは本学の紀要などへの投稿を行いたいと考えている。また、撮影した写真や収集した資料は、学部における文化論の授業にも積極的に活用していく計画である。